

## 合唱活動における学習過程と学習形態に関する一考察

### A Study on Learning Process and Learning Form in Chorus Activity

岩 崎 洋 一

Yoichi Iwasaki

(1988年9月10日 受理)

#### I 緒 言

今日、子どもを取りまく環境は、速い流れの変化が起っており、個性・個別化、自己教育力が叫ばれる中、学習活動を支える集団的規律や態度が形成されていない子どもたちが増えている。昭和64年度からは、学校教育の週休2日制の実験実施が始まろうとしている。

学校教育は、子ども一人ひとりの人格に働きかけ、その人格が一人歩きできるためのプロセスを、学習活動として保障していくことではないかと考える。そこには、子どもたちの意欲的な主体的な学習を可能にするダイナミックな学習過程と、その学習を展開する中で生じてくる、教師側の働きや、教材を通した子ども同士の働きかけなど、授業の中で絡まり、はぐれ、一本に寄り合わさっていくものである。

いまや、そのような教育の規範は、学校における教科内容の研究や指導技術だけでなく、社会教育を含めた子どもの文化活動や集団活動など、広い視野を含めた取り組みが必要とされているのではないだろうか。

私は現在、社会教育の中の少年少女合唱団にかかわり、合唱指導を行っている。その合唱活動の中では、指導する側と子どもたち、そして、子どもたち同士のぶつかりと協力、互いの発見の中で、指導者の予想を越えたエネルギーとして、合唱活動が構成され、ハーモニーの輪の広がり、心をゆさぶる響きに感動する子どもたちの姿がある。

そこで、本稿では、一見個が見えにくいとされる形態を取っている合唱活動に視点をあて、そこで行われる教授・学習の過程の中から出てきた、学習形態を整理することにより、学校教育での音楽学習に敷衍できる原理、法則を探り、導き出すと試みるものである。

それは、合唱活動での指導のあり方が学級集団と同じく、基本的な形態として、一人の指導者が一人を教えるという個人指導ではなく、常に個の集まりとしての集団を対象とした指導を特徴としているからである。そして、合唱活動が集団として結実する活動でありながら、結局は、個々の力量を身につけていく授業でのプロセスと同じだからである。

#### II 合唱活動における学習展開と子どもの活動

人間の認識活動は、感性的に対象の比較的直接的な反映として促えられたものが、分析と総合、概念の形成と分類などの知的操作を経ることによって、科学的なものに変えられる過程<sup>1)</sup>と定規づけられてるが、対象に対して能動的に働きかけ、それを変化、改造させる実践過程の中に生じるといえよう。

そこで、子どもたちにとって学習活動とは、教師の提示した知識、技能を、単に機械的に記憶していくだけの活動ではない。新しい学習課程を習得していくには、子どもたちが既存の知識、技能を駆使して、新たな課題を習得できるような、学習活動を組織しなければならないと考える。

そのためにも、指導者は、子どもたちに何らかの形で、集団的に学習に取り組む方法を指導しなければならない。合唱活動においては、完成された知識、技能を直接子どもに受容させるのではなく、個人差がある子どもたちがそれぞれに文化遺産、技術を習得していく過程を大切にすることである。

それでは実践例から、学習の流れの中で学習形態がもつ意味と有効性、それに、その学習を組織する条件を探ってみたい。

表1 合唱活動の展開例

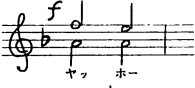
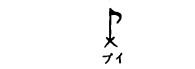
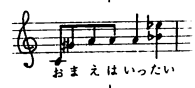
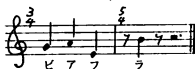
学習の流れ	教材	学習内容	指導者の発言	子どもの活動(発言・反応)	学習形態
声の出し方の工夫 	おおブレネリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>発声</li> <li>素直な声で歌う。</li> <li>共鳴の統一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽に出せる声をめざそう。</li> <li>一人ずつどんな声が出せるようになったか歌ってみよう。</li> <li>一人ひとり評価を加え、眉をあげて歌ってみると声も明るくよく響くようになるよ。</li> <li>A君、どんなにしたら高い音が楽に出せるようになったの。</li> <li>それではA君の方法で声を出してみよう。</li> <li>パート別に分かれて練習しよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦どのようにしたら楽に声が出るようになるかわからない。 「リレー唱」をしていく。</li> <li>㊦教師の評価に、あのようにすると良いのか自己目標をもつことができ、眉をさわったり咳ばらいが多くなる。</li> <li>㊦目に力を入れてあくびをするようにして歌ったら出た。</li> <li>㊦自分には合わないな。</li> <li>㊦自分のようにしたら出た。 「パートリーダー」が中心となり指示を出していく。</li> <li>㊦もう少し笑顔で歌おうCさん。</li> <li>㊦互いの声を聴き合う中で、音程、共鳴を自己修正していく。</li> </ul>	<p>一 斉</p> <p>一 斉 (リレー)</p> <p>一 斉</p> <p>グループ</p>
表情の工夫 	シャシャブとグイミ	<ul style="list-style-type: none"> <li>フェイストレーニングをする。</li> <li>目を見開く</li> <li>鼻にしわをよせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の顔を鏡で見ながら色々な表情をしてみよう。</li> <li>他の人が見て、自分の表情がちゃんと伝わるか「ペア」をつくって互いにやってみよう。</li> <li>次に、どのペアが「ブイ」とした感じが出ているか「競争」してみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦一人ずつ自分の表情を鏡でみて確認しながら行う。</li> <li>㊦そんなおもしろい顔の表情が良く出来るね。</li> <li>㊦早く出来るように頑張ろうと互いに声を掛けながら、意欲的に練習に取り組む。</li> </ul>	<p>個 別</p> <p>グループ</p> <p>グループ</p>
旋律を覚える 	おでこのこいつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>旋律の動きを正しく覚える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>こんなメロディーだよ。</li> <li>それではパートに分かれて音取りをしよう。</li> <li>できたようだから、他のパートと合わせてみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>㊦むずかしい。</li> <li>㊦パートリーダーを中心に音取りをする。</li> <li>㊦「パートリーダー」の発言。 先生、他のパートと一緒に合わせると、A部分の音がまだ取れていない団員が多いので、もう一度音の確認をお願いします。</li> </ul>	<p>一 斉</p> <p>グループ</p> <p>一 斉</p>
歌い方の工夫 	おでこのこいつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>歌詞の内容を理解し表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アフリカの内戦で飢餓に瀕している子どもの話しをする。</li> <li>お腹がへって倒れそうになった時、どんな声になるかな、一人ずつやってみよう。</li> <li>お腹がへっている感じが良く出ているね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「リレー唱」をする。</li> <li>㊦あんな歌い方は感じがよく出ているな、あの歌い方は自分にあわない等、評価、選択し、自己目標に近づける歌い方の工夫をする。</li> </ul>	<p>一 斉 (リレー)</p>

表1は、合唱活動の展開例であり、①「学習の流れ」で活動のねらいを設定し、②具体的な「教材」でもって、③ねらい達成のための「学習内容」を定め、④実際の学習で「指導者が発する発言」と、⑤それに対する「子どもの反応、発言」を表したものである。

### 1 リレー唱

合唱は一斉形態でありながら、練習過程においては、グループに別れたり、個別での取り組みを多く有する学習形態である。表現においても、楽曲構成から、tuttiやパート soloといった形態が絡まり、一つの大きな響きの空間を創っているのである。

このリレー唱は、表1では「声の出し方の工夫」と「歌い方の工夫」で行われているが、一人ずつ順番に声を出す形態であり、一斉学習の中にありながら、個別学習にあたるものである。

ともすると、合唱指導では、教わる側の個を複数にしないで、個別指導の指導原理を拡大して行っている場合を見るが、これでは個が沈んでしまう。そこで、リレー唱を学習過程の中に組み込むことにより、一斉学習でありながら個が良く見えてくるのである。

この形態は、他の個との相互作用によって自己の学習目標を設定したり、自分の声の変容を促す、意識の高揚を含めた有効性があるように思われる。

この形態が成り立つためには、教師の意図した指導を明確に子どもに提示しなければならない<sup>2)</sup>。それは、何のためのリレーなのか、はっきりとしたためあてを子どもたちに提示し、そのテーマが告げられることにより、子どもたちは注意すべき点や目標に焦点をあて、積極的に聴き取っていかうとするのである。

これは、他の個から発せられる情報を注意深く聴き取ることによって、自己のねらいや要求を主体として設定しようとするものであり、これまで同じと思っていた友達が、いままでと違った発声をすればする程、驚きと緊張でもって、その発声を自分の中に取り込もうとするのである。それはこの形態が必ず他者から評価を得る形態であり、一人ひとりに順番が回ってくる形態だからである。

このように、他者の表現を自己の中で咀嚼し、自己の表現を練り直す過程が成立するためには、子どもが教師に対し心を開いていだけでなく、他の個を認め、構成員の他の子ども全体に対しても、心を開いていかなければならない<sup>3)</sup>。

また、指導する側から、このリレー唱が成り立つ要因として、一人ひとりの子どもにもその都度、評価を与えていく必要があげられよう。

いままでと違って響きの良い発声をした友達の表現にどよめきが起こった時、即時的に“声を目にあてた感じがいいね”とか“顎に力が入ってなくていいね”など、他の個にも反映できる評価を与えてやるのである。また、課題を未消化にしている子どもには、“背中が曲がっているからかな”とか“目を大きく開けて声を出してみよう”といった評価と指導を加えていくと、次に控えている子どもたちの中から、咽の状態を確認する咳ばらいや、体をリラックスする動きが出てくるなど、真剣に学習に取り組む子どもたちの適度な緊張感が伝わってくるのである。

このように、教授・学習活動に内存して発動される教師のその時々々の評価活動を、指導的評価活動として次のような条件をあげている<sup>4)</sup>。

① 子どもたち自身が主体的に自己活動するための「やる気」を引き出すものでなければならない。②教師の評価基準がその時々々の学級の状態や力量に応じて、順次に高められていかなければならない。③教師の評価は、否定的でなく、肯定的なもの、積極的なものに方向づけられなければならない。④子どもたちが「認められた」という喜び、満足感、達成感をつくりださなければならない。

その他、このリレー唱では「わかり方の違い」すなわち「色々な方法」を学ぶことが多いと思われる。

例えば、表1の「声の出し方の工夫」や「歌い方の工夫」で見られるように、子どもたちは各々独自の経験や持ち味をもって、既知、既習の中から自分に合った色々な発声や表現を試みるのである。そして、他の子どもは、それらの発声や表現の中から、自分に合った手法を取捨選択し、表現していくのである。このような相互作用により学び方を学んでいくことになるのである。

### 2 グループ活動とリーダー

グループを編成する場合、大きな問題は、学習の個人差をどう組織していくかである。すなわち、「よく歌える子」と「歌えない子」の学習成果に応じて能力別に分ける等質集団と、子どもの能力差に関係なく組織する異質集団がある。

合唱活動の場合、能力差のある子どもたち、すなわち、新入団員のみをグループ学習させるよりも、全体の中で新入団員を位置づけ、活動させる学習集団の方が、構成メンバーとしての自覚や技

術面での向上など、より早く成果が現れることを経験的に理解しており、後者の組織の考え方が有効であろう。

それは、合唱組織がもつ意味として、合唱活動は一人が頂点を極めるための集団ではなく、組織として目的を担うものであり、コンクールにおける少数精鋭組織ではなく、子どもたち一人ひとりの育成を目的とした集団である。そのために、互いに刺激し合い、向上するためのグループ組織であり、学習を協同化していこうとする組織でなくてはならない<sup>5)</sup>。

それは、グループとしてパート練習をする場合に良く現れてくる。小集団の教育効果として、①全員が参加し、発言しなければならぬ状況がつけられ、②「たてまえ」でなく「ほんね」の発言を出し合い、③互いに援助、協力し合いながら、相互に批判、啓発し、④「わからない」「もっと詳しく」といった学習要求が出されなければならない<sup>6)</sup>、と言われているが、パート練習の場合、個と個との密接な結びつきが容易になり、一人ひとりの音の確認ができやすくなるともに、歌い方の工夫や、それぞれの表現方法を各パートで検討することができるなど、子どもの考え方を多様に引き出しうる形態といえよう。

そして、パート別に練習する意味は、①各パート独自の表現を短時間に習得できるという教授の経済効率が考えられ、②小人数のためコミュニケーションが図りやすく、合唱集団にとけ込ませやすくなり、各パート別の表現の統一など、協同化を図っていくうえで有効と考える。

しかし、このように有効に働く組織としてのパート練習であっても、音取りや音楽表現の工夫を推進できる組織になっていないと、音取りが不確実になったり、時間がかかりすぎるなど、外面的な活動に終わってしまい、思考や技能が深まらない状況がでてくる。

このパート練習が成り立つ条件として、パート内での活動を組織し、方向づける役割をもつ、パートリーダーの存在を見のがすことはできない。

そこで、このリーダーの位置づけと働きかけに検討を加えてみたい。

どういう役目がパートリーダーに求められるのであろうか。一般に次のようなことがあげられる。

①欠席団員や遅刻した団員の世話をする。②パートの移動や配列の指揮をとる。③練習中は団員に指示を与え、パートの運営を円滑にさせる。④団員の希望、意見などを指導者に連絡する。⑤団の規律を守らせ、指示を徹底させる。⑥音取り

や音楽づくりでは、パートの模範になるようにする。

これらを整理してみると、リーダーに要求される指導力は、①集団をまとめていく力と、②音楽内容を伝えていく力に分けることができる。

パートリーダーの場合、まず団員を組織的にまとめていく力が求められよう。そうしたうえで、パートの団員が「わかったかどうか」、また「できたかどうか」を確認しながら、指導者の指導展開に対して、表1の「声の出し方の工夫」のように、パート練習の際の他の団員への指示や、「旋律を覚える」活動で、「先生、Altoの低い音の音程が難しいので、もう一度やって下さい」とか、パートの団員に対し、「Mezzoのみんな、この音伸ばしすぎよ」などの発言要求をしていく役割が求められているといえる<sup>7)</sup>。

このように、団員一人ひとりが主体的に練習に参加していける取り組みを確認できる能力が必要とされるが故に、リーダーは組織的的力量が必要であるが、パートリーダーは、教科的力量も兼ね供えて、パート内の表現を評価し、表現に修正を加えていく力が要求されるといえよう<sup>8)</sup>。

次に、そのリーダーをどのように育てていくか、その過程をみてみよう。

まず、インスペクター、パートリーダーは中学生から選出しているが、まず指導者が、その子どもたちの中で、団に何らかの影響を与えている個を目やすとして、団員への連絡事や、隊列の組みかえなど、当面の指導の役割を与えていく。そのうち、他の団員と違ってリーダーとしての自覚をもって集団の先頭で働く者が必然的に出てくる。そのことにより、他の団員はその団員の存在を認めはじめ、リーダーとしての位置づけがなされていくのである。そのように位置づけられたリーダーは、演奏会に向けて日ごろと違った練習内容を、我々指導者の見えないところで設定し、団に働きかけ、動かしている姿を合唱活動で見るのである。

このようにリーダーが育ってくると合唱団の子どもたちの組織は、指導者の指導力によるまとまりから、子どもたち自らで練習を始めるなど、集団のリーダーであるインスペクター、パートリーダーが指導力や管理力において団をまとめ、集団そのものが一つの行動を生み出していけるようになるのである。

また、リーダーを育てることは、リーダー側だけの問題ではなく、リーダーをリーダーとしてと認める側の育成も必要とされる<sup>9)</sup>。

### 3 ペア

合唱活動の場合、2人一組でのペアの形態を組織することが多くある。表1の「表情の工夫」で行っているが、合唱団の場合、同学年よりも一方が上級生、他方は下級生といった異年齢の組織とする場合が多い。

この形態では、上級生が下級生へ、「こんな表情で歌ったら曲の感じがよく出たから、やってみて」というように、自分の学習と平行して仲間に関わりかけ、援助活動をしているのである。

これは、上級生にとって、自分の目の前にいる団員を意識せざるをえなく、どうしても他者に働きかけざるを得ない形態となっており、自分は下級生から頼られている、といった気持が、自らを学習へ向かわせる力となっている。そして、教える側はそれ以前の知識、技能を再認識でき、いまままで漠然と使っていた方法も、自覚的に使える機会になるのである。

このような団員同士の教え合いは、指導者からの一方的にあてがわれた教わり方と違い、受け身の姿勢から脱け出し、自分の問題として意識して学ぶことを促すと考えられる。

この異年齢の形態がもつ長所と短所を拾ってみると、次のようになろう<sup>10)</sup>。

年上の団員にとっての長所は、①他の個を援助することの技能を学ぶことができる。②教えるという向上心が、知識、技能のギャップを埋めることにつながっていく。③自分の知識を用い、考えを実践に移す機会になる。

年上の団員にとっての短所は、①下働きの仕事を与えられるかもしれない。②年下の団員に、自分の意志が伝わらないかもしれない恐れ。

年下の団員にとっての長所は、①世話をしてくれる先輩がいることへの安心感。②それ故、成就感が得やすくなる。③先輩は下級生の考えを、子どもの言葉で解釈してくれる。

年下の団員にとっての短所は、①いつも先輩に頼ってしまい、自立しない面がでてくる。

このように合唱活動のペアで、これまで集団に埋もれていた個が自覚し、伸長する姿をたびたび見てきた。

この場合、気をつけなければならないことは、集団を構成する個と個の関係において、他を無視したり、見くだすことが起こってくると、個の存在が保障されなくなり、集団の意味はくずれ個のみで得ることのできない目標を実現することは不可能になってくる。

次に、合唱活動の中で、ペア同士、又は、各パー

ト間での競争に視点をあててみたい。

表1の「表現の工夫」でわかるように、競争においては、そのペアの凝集性を高めることになり、相互の教え合いが活発になってくる。早く出来るようになるためには、互いの相互関係の中で、教える側の団員は「自分の教えた事がわかってくれた」という経験をし、教わる側も一生懸命に向上しようとする姿がある。

このように、この競争は順位を決めることが目的ではなく、集団の中にゆさぶりをかけ、子どもたちの要求や問題点を引き出すとともに、それらを前進的な方向へ導く契機をつくり出すために行うのである<sup>11)</sup>。しかし、ともすると競争のみが前面に出てしまい、攻撃、防衛の心的機制を生じさせる結果にもなる<sup>12)</sup>。

また凝集性が高まってくるため、相互の教え合いは活発になるが故に、少数者の自由意志が無視されてしまい<sup>13)</sup>、合唱団にとっての共同目標である表現に向かったの助け合い、励まし合いが欠落し、仲間から離れてしまう場合がある。

そうならないために、指導者と団員との間で、誰れもが評価しても共通の結果となるような客観的なものの設定、すなわち、「目を大きく開けていたかどうか」とか「唇をよく使っていたかどうか」といった、互いに納得できるものに対して用いるべきであろう。

## Ⅲ 学習内容と学習形態の流れ

### 1 学習形態の移行

表2は、一般に行われている合唱活動の流れを、マトリックスとして提示したものである。

それは、それぞれの学習形態が、どの学習場面で、学習する子どもたちにとって有効なのかを示す一つの材料として提示したものである。

合唱曲の多くは、主旋律に機能と和声をもって各パートの旋律が構成されている場合が多い。そこで、新曲であればなお更、全員で主旋律を歌い、どのような曲かを把握する①。そのことがウォーミングアップとなって、合唱に対する意欲づけができ、体と咽の暖まりとともに、発声練習に入っていくのである。

②③の準備運動を全員からペアへ、腹筋や背筋を有効に働かせるための発声体操であり、一人で行うものと、二人ペアで行うものを組み合わせて展開するものである<sup>14)</sup>。

呼吸も同じく④⑤とペアへおろし、互いのお腹に手を当てて、相互確認しながら進めていく。

表2 学習内容と学習形態の流れ

学習の流れ 学習形態		声の出し方の工夫				教材の要素内容						表情の工夫				
		準備運動	姿勢	呼吸	共鳴	リズム	旋律	和声	速さ	強さ	拍子	歌詞	動かす顔の筋肉	唇のさばき		
一斉	全員	②		④	⑧		①					⑬		⑭	⑮	⑱
	リレー															
グループ	パート															
	ペア	③		⑤		⑥	⑦	⑨	⑩							
個別														⑰		

共鳴では、個が良くみえる⑥のリレー形態をとり、指導者からの評価指導も得ながら、他者の良いところを課題のめあてとして取り入れ、パートの発声の統一⑦から、まとまりある全体へ⑧。

要素内容では、⑨のパート独自のリズム取りから、⑩のペアによる教え合いと、競争による凝集性の高まりで、リズムの難しい箇所を学習し、各パートの旋律を⑪、指導的評価を伴った⑫のリレーにより確認し、各パートのハーモニーを全員で合わせる⑬。

表情の練習では、⑮で学習のねらいを全員で確かめた後、⑯の個別で、自分の顔を鏡で見ながら、唇やほおの動き、口の開け方などを確認した後、ペアによる相互評価を行い⑰、一斉へ⑱、という過程である。

このような流れから、感覚的感受を伴った発声面や、楽譜の理解を通じた表現面では、集団の成員がもっている相互作用の力が、大きな影響を与えており、受動的には身につけにくい身体表現や表情の工夫などは、個別の指導を多く取り入れる必要があるであろう。

## 2 学習形態と学習の流れ

これまで、授業は通常、三角形モデルといわれる、教師、子ども、教材の三者から成り立っており、授業の構成要素を実体的に示しているが、授業を過程的に促えていなく、静的な構造図になっている。

そこで、授業を想定した場合、子どもの成員は一人ではなく、常に複数として構成されており、これまでの三つの要素から、子どもを複数とした四つの要素から促え直した方が自然ではないかと考える。それは、①特定の子どもの学習活動、②他の子どもの学習活動、③教師の教授活動、④教材の諸属性の相互作用とみることができよう<sup>15)</sup>。

図1の個別学習では、本人にとって他の諸要素は外的条件であり、様々な情報を得る過程である。他の子どもの学習過程や態度の情報(a)が、本人や教師に入ってくることになり、教師は指導の法則を見出し、本人は他の子どもの情報を漠然と受け止めている中で、教材と本人の相互作用をゆさぶる、教師からの教授活動がなされるのである。

図2のリレーでは、本人にとって求めている内容は、他の子どもからの情報を選択し、自分にあてはめてみるのであるが、そのより所となるのは、教師が他の子どもからの情報を、その都度評価を加えていく評価活動(b)であり、その評価指導を、本人も含め構成メンバーが自分のものとして共有し、自分の既有的知識、技能の中に取り入れ、実践していく、連続過程である。

図3のペアは、本人と他の子どもの相互関係が、教師の働きかけよりも緊密になり、他のグループの活動も促えながら、教え合いや競争を通して共同体として強固なものになり、他の要素と相互作用を行うものである。

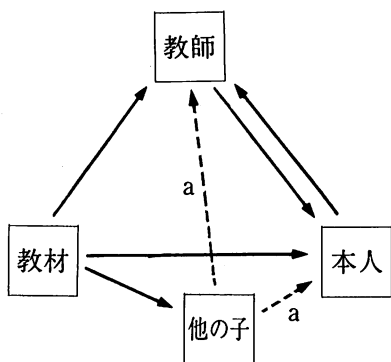


図1 個別

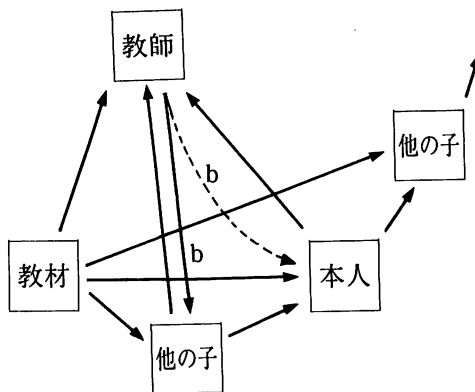


図2 リレー

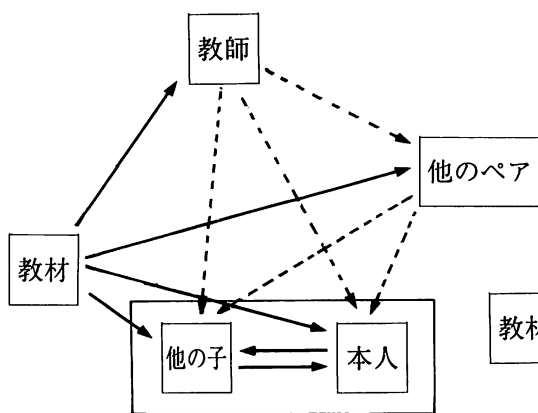


図3 ペア

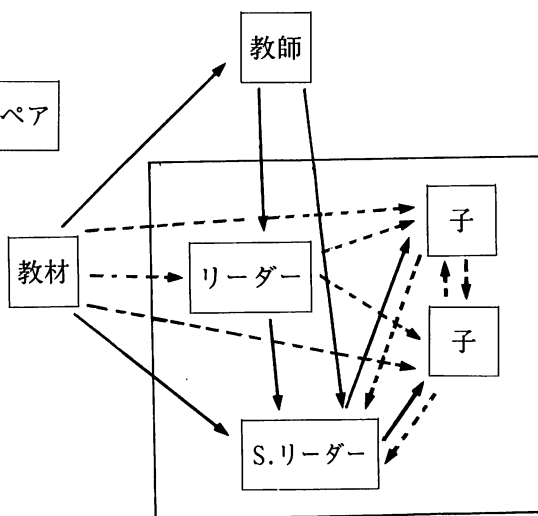


図4 グループ  
(リーダー=組織的力)

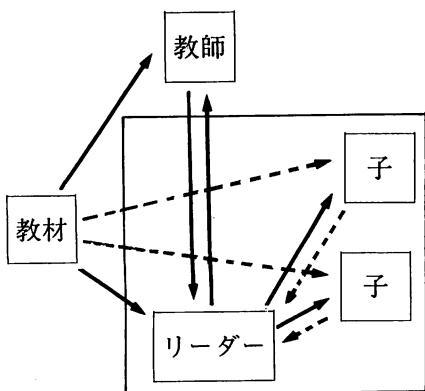


図5 グループ  
(リーダー=教科的力)

図4は、グループでの組織的力をもった場合であり、パート練習などでは、サブ・リーダーがピアノ、オルガンを弾き、リーダーは学習成果があがる学習組織として導いていくのである。

図5は、グループでの教科的力をもったリーダーであり、集団の構成メンバーに直接働きかけ、教師に要求を出していく相互作用を担っているといえよう。この場合、リーダーは組織的力も兼ね具えている場合が多い。

#### Ⅳ 結 び

これまで合唱活動で行われている学習過程の中で、学習形態がどう位置づけられ、それぞれの形態がもつ組織力、相互関係が、合唱活動を成り立たせるうえで、どのような意味をもつのかを探ってきた。言いかえれば、学習過程の中で、教師、

子ども、教材がどのような形で有機的に機能し個の成長に寄与するための学習形態であるかを、模索したのである。

これら合唱活動から導き出された理論なり方法は、学校教育での授業と同質の法則になるであろうし、授業の構造として提示した三角形モデルの変形は、今後、吟味され、他の学習形態と連動させ、整理される必要がある。

個の自己実現が叫ばれる中、集団での学習指導の画一的性格を容容させるために、グループ学習、個別学習、リレー、ペア、といった形態を含めた組織上の改善が試みられているが、これら学習形態の絡まりが、子どもたちの認知や表現の質に変化を起こさせ、学習過程において他の個を認めるとともに、一人ひとりの個の伸長をも保障していくものと思われる。

#### 注

- 1) 「授業研究大事典」P. 251 明治図書 昭和50年
- 2) 「音楽教育学の展望」柳生力 P. 143~145 音楽之友社 昭和54年
- 3) 林竹二「授業の成立」P. 86 一葉書房 昭和52年
- 4) 吉本均「授業展開の教授学」P. 182~185 明治図書 昭和55年
- 5) 「現代学習集団の構造」藤原幸男 P. 22~27 東方出版 昭和50年
- 6) 吉本均「授業をつくる教授学キーワード」P. 188~189 明治図書 昭和61年
- 7) リーダーの役割として、①すばやく反応する、②ぬけめなく質問する、③班にたえず目を向ける、④話し合いを組織する、などがあげられる。  
北林正「学習リーダーの育成」『授業研究』No. 255 P. 130~131
- 8) 班のリーダーと学習リーダーとの区別について、班のリーダーは協働的な学習内容を深めにくい状況が生じたときからでよいとする意見を見られる。「授業設立の教授学」折出健二 P. 124~125 明治図書 昭和55年
- 9) 磯具芳郎「集団の心理学」P. 175~177 講談社 昭和58年
- 10) 波多野誼余夫「自己学習能力を育てる」P. 202~203 東京大学出版会 昭和59年を参考に岩崎がまとめたものである。
- 11) 坂本光男「集団づくりのための班の指導」P. 12 明治図書 昭和57年
- 12) 片岡徳雄「個を生かす集団づくり」P. 34 黎明書房 昭和60年
- 13) 注11)の文献 P. 95
- 14) この体操は、阿部昌司「音楽教育における合唱の意義と実践例」『音楽鑑賞教育』No. 91に詳しい。
- 15) 東洋「教授・学習システム」P. 105 大日本図書 昭和46年